

最適カットオフ値、感度・特異度は、RDI_TIB: 0.934、15.0、79.3%・100%、RDI_eTST: 0.895、14.9、86.7%・91.7%であった。AHI \geq 15では、RDI_TIB: 0.863、15.9、86.4%・80.8%、RDI_eTST: 0.860、17.0、90.9%・76.9%であった。AHI \geq 30では、RDI_TIB: 0.925、23.8、84.2%・92.2%、RDI_eTST: 0.927、26.0、89.5%・88.2%であった。AHI \geq 5に対してRDI_TIB、RDI_eTSTのカットオフ値を5とした感度・特異度は100%・8.3%、100%・8.3%、AHI \geq 15に対してRDI_TIB、RDI_eTSTのカットオフ値を15とした感度・特異度は86.4%・69.2%、95.5%・61.5%、AHI \geq 30に対してRDI_TIB、RDI_eTSTのカットオフ値を30とした感度・特異度は36.8%・98.0%、63.2%・94.1%であった。

【考察】 OSASが疑われる患者集団においてRDIはAHI \geq 15およびAHI \geq 30の患者を良好な感度・特異度でスクリーニングできることが示唆された。一方でRDI_TIBと比較するとRDI_eTSTでは若干の改善が認められるものの、AHI \geq 30の患者では過小評価となる傾向があることに注意が必要と考えられた。AHI $<$ 5の患者ではRDIは過大評価となる傾向が強く、軽症者のスクリーニングには適さないと考えられた。

P3-44.

子宮内腔良性腫瘍を有する不妊患者の術前後における子宮内膜妊娠関連因子の変動

(東京薬科大学: 内分泌・神経薬理学教室)

○田村 和広、吉江 幹浩、立川 英一

(産科婦人科)

小島 淳哉、井坂 恵一

【目的】 子宮内腔のポリープや筋腫等の器質的な病変は不妊症の原因の一つとなり、これらの摘出は妊娠率を改善する。これは病変による卵管や内膜の圧迫による器質的な着床障害の回復によるところが大きいと考えられるが、患者での病変切除による内膜機能の変化は明確ではない。今回、不妊と診断されたポリープを有する女性での術前と術後の正常部の子宮内膜における妊娠関連因子の発現量の変化を比較検討することにより、子宮内良性腫瘍の存在が与える子宮内膜での妊娠関連因子への影響を解析した。

【方法】 倫理委員会の承認を得て、東京医大にて手術を受けた患者27名を対象とした。ポリープ(一部、子宮粘膜下筋腫)摘出術の術前後における分泌期(周期18~25日)子宮内膜の妊娠関連因子〔インスリン様増殖因子結合タンパク質(IGFBP)-1、IGFBP-7、シクロオキシゲナーゼ(COX)-2、カルレチキュリン(CAL)、HMGB1〕の発現量を定量的リアルタイムRT-PCRにて測定した。また、各発現量間の相関係数を算出し比較した。

【結果】 全症例における術前術後間の血中エストロジオール、プロゲステロン値に有意差はなかった。子宮内膜IGFBP-1とCOX-2発現量は術後に低下傾向、一方、IGFBP-7とCAL量は増加傾向にあった。HMGB1に術前後での差はなかった。術後に増加傾向が観察されたIGFBP-7とCAL量は、両者間に高い正の相関性が、術前及び術後でみられた。また、IGFBP-7とCOX-2間、並びにCALとIGFBP-1間の相関性は、術後に高値を示した。

【考察】 腫瘍摘出術により、内膜の胞胚受容能や脱落膜化に関与することが報告されているIGFBP-7とCALの発現に増加傾向がみられた。また、摘出術によりIGFBP-7とCALは、各々、エストロゲン作用により着床部位で活性が上昇するCOX-2及び脱落膜化マーカーであるIGFBP-1間との発現の相関性が高まった。以上の結果を合わせ考えると、摘出術は、着床に向けた妊娠関連因子の協調的な発現を生ずることが推察された。

P3-45.

Evaluation of gynecologic laparoscopic surgery using the subcutaneous abdominal wall lifting method in Tokyo Medical University Hospital

(社会人大学院博士課程4年産科婦人科学)

○小野 理貴

(産科婦人科)

長谷川 瑛、寺田 秀昭、永光 雄造

伊東 宏絵、井坂 恵一

【目的】 腹腔鏡手術は開腹手術に比し患者への侵襲の軽減、創部の縮小、入院期間の短縮などのメリットがある。産婦人科領域でも症例数は増えており、適応疾患も拡大している。自施設で施行した5,110例について検討した。

【方法】 当科において1992～2014年までの23年間に皮下鋼線吊り上げ式法腹腔鏡下手術を5,110例施行した。診療録を用い後方視的に術式の内訳、年齢、BMI、出血量、手術時間、再手術、開腹へ移行率についてそれぞれ検討した。

【成績】 術式の内訳は卵巣腫瘍摘出術(32.1%)、付属器切除術(6.71%)、子宮筋腫核出術(38.5%)、子宮全摘術(7.2%)、異所性妊娠手術(11.5%)、その他(4.1%)であった。患者の平均年齢は39.3歳でBMI 21.1であった。手術の平均出血量は153.2 mlで平均手術時間は131.3分であった。また術中に開腹に移行した症例、術後に再手術に至った症例は共に0.28%であった。

【結論】 我々は以前より皮下鋼線吊り上げ式法は安全性、操作性、経済性に優れた術式であることを報告してきたが、今回再手術、開腹率の観点からも有効な治療法であると示唆された。今後も症例を重ね、検討を続けたい。

P3-46.

腎機能低下が筋ジストロフィーマウスの骨ミネラル代謝異常を惹起する

(病態生理学、東京大学大学院 総合文化研究科)

○和田 英治

(病態生理学)

林 由起子

(東京大学大学院 総合文化研究科)

吉田 瑞子、松田 良一

(大阪大学大学院 医学系研究科)

濱野 高行、松井 功

デュシェンヌ型筋ジストロフィー(DMD)は最も頻度が高く、かつ重篤な遺伝性の筋疾患である。現在のところ根本的な治療法は確立されていないが、人工呼吸療法や心筋保護療法によって患者の寿命は飛躍的に延びている。一方、大多数の患者が骨密度低下による骨粗鬆症や骨折を経験し、さらに患者の高齢化に伴い腎機能低下などの多臓器不全が新たな合併症として報告されている。

我々はこれまでに、食生活において問題視されているリン過剰摂取がDMDモデルマウスであるmdxマウスの骨格筋症状を重篤化することを報告した。この結果を踏まえ、本研究ではmdxマウスは腎機

能が低下していると推測し、腎機能低下が骨ミネラル代謝に与える影響を検討した。骨格筋量に影響を受けない腎機能の指標であるCystatin Cの血中濃度は、mdxマウスにおいて有意に増加しており、さらにX線micro-CTスキャナーを用いた腎機能テストにおいても腎機能が低下していることを明らかにした。また、mdxマウスの血中カルシウム濃度が高値であることに着目し、尿排泄量とヘマトクリット値を測定した結果、脱水症状であることを突き止めた。このことから、mdxマウスは筋ジストロフィー症状による筋崩壊と不動症が原因で血中カルシウム濃度が増加し、脱水を引き起こすことで腎前性腎不全に至ることが明らかとなった。さらにmdxマウスに食餌中リンを負荷すると、血中リン酸濃度が増加し副甲状腺ホルモン(PTH)が有意に上昇した。mdxマウスは腎機能が低下しているためPTH抵抗性が起こり、骨が正常の代謝・回転を維持できなくなるuncouplingが生じることで骨粗鬆症が亢進することが明らかとなった。これらの研究結果から、DMD病態と腎機能低下による骨ミネラル代謝異常は、DMD患者が骨を健康に保つ上で今後さらに着目されるべきであり、対処療法の確立が重要であるといえる。

P3-47.

IgA腎症に対するステロイドパルス療法の用量別効果に関する検討

(腎臓内科)

○渡邊カンナ、岡田 知也、長岡 由女

岩澤 秀明、和田 憲和、権藤 麻子

宮岡 良卓、壽 智香、菅野 義彦

【目的】 IgA腎症に対し扁摘ステロイドパルス療法(TSP)をおこなう際のステロイド投与法は確立されていない。Pozzi方式(パルス療法0、2、4か月後各3日間、経口PSL 0.5 g/kg 隔日6か月間)におけるメチルプレドニゾロン(mPSL)投与量の違いによる免疫学的指標、治療効果の差異について検討した。

【方法】 IgA腎症患者を対象に、扁摘後無作為にmPSL 1 g/日群(A群8名)、0.5 g/日群(B群8名)に分け、Pozzi方式のステロイド投与をおこない、免疫学的指標、治療経過を6か月間観察した。